

〈資料紹介〉

一九五〇年代における雑誌『明星』の連載小説とそのメデイアタイアップ
展開（付・一九五〇年代『明星』連載小説一覧）

阪 本 博 志

一 はじめに——本稿の目的

二〇二七年に集英社発行の雑誌『明星』（一九九二年十月号より『Myojo』が創刊六五年を、先行誌『平凡』（マガジンハウス）が休刊三〇年を迎えた。

『明星』については同年、田島悠来『アイドル』のメデイア史——『明星』とヤングの七〇年代』（森話社）が刊行された。同書は、一九七〇年代の『明星』という雑誌メデイアでの「アイドル」の表象と受容を探ることを目的とした（二三五頁）ものである。

これに対し本稿では、拙著『平凡』の時代——一九五〇年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』（昭和堂、二〇〇八年）と

同様のアプローチから『明星』に光をあてる。具体的には第一に、同誌が大衆娯楽雑誌であった一九五〇年代に連載された連載小説の全体像を概観する。第二に、そのなかでもとくに代表的な作品と他のマスメデイアとの関連のありようを、誌面調査から明らかにする。

二 一九五〇年代『明星』連載小説の全体像

まず、表一九五〇年代『明星』連載小説一覧）をご覧いただきたい。これは、創刊号（一九五二年十月号）以降一九五九年十二月号までのあいだに『明星』で連載が開始された小説を一覧表にまとめたものである。

表…一九五〇年代『明星』連載小説一覽

開始年	月	作品名	作者	終了	映画製作	他メディア	画	備考
一九五二年	十月号	美しき夜なれど 天使もお年ごろ	竹田敏彦	一九五三年三月号	大映		富永謙太郎	
		この世の花	中野実	一九五五年八月号	大映		田中比左良	
		朝霧峠	北條誠	一九五五年八月号	松竹	ラジオ	岩田専太郎	一九五五年三月号は平野林作・画
		飯面の街	山手樹一郎	一九五三年六月号			中一弥	
		飯面の愛情	島田一男	一九五二年十一月号			伊勢田邦彦	
		青い霧の秘密	島田一男	一九五三年一月号			伊勢田邦彦	
一九五三年	二月号	飯面の微笑	大林清	一九五三年四月号	東宝		成瀬一富	
	四月号	飯面の花嫁	島田一男	一九五三年五月号			伊勢田邦彦	
	五月号	朱唇愁いあり	島田一男	一九五三年五月号			伊勢田邦彦	
		銀座令嬢	大林清	一九五四年七月号			富永謙太郎	
	六月号	飯面の天使	宮本幹也	一九五四年十一月号	松竹		堂昌一	
		花開く乙女たち	島田一男	一九五三年七月号			伊勢田邦彦	
	七月号	見ないで頂戴お月さま	池田みち子	一九五五年四月号	理研映画		成瀬一富	
	八月号	飯面の怪盗	堤千代	一九五三年八月号			下高原健二	
	十月号	雪月花忠臣蔵	島田一男	一九五三年九月号			伊勢田邦彦	
		金色の花粉	沙羅双樹	一九五四年二月号			土端一美	
一九五四年	五月号	赤い影の女	島田一男	一九五四年四月号			上西憲康	
	六月号	娘十八ご意見無用	島田一男	一九五四年十月号	日活		伊勢田邦彦	
	十月号	噫(あゝ)その人を…	中野実	一九五五年九月号			田中比左良	
	十月号	中野源治の冒険	菊田一夫	一九五五年十一月号	東映	ラジオ	成瀬一富	
	十一月号	君を呼ぶ悲歌(エレジー)	山川惣治	一九五五年八月号	東映		伊勢田邦彦	
	十二月号	伊太郎獅子	大庭さち子	一九五五年一月号	大映		伊勢田邦彦	
一九五五年	一月号	マリヤ観音	子母沢寛	一九五五年二月号	大映		志村立美	
	三月号	お役者坊主	北村寿夫	一九五五年十一月号	松竹	ラジオ	原研児	一九五五年十一月号より矢島健三・画
	五月号	花嫁はどこに いる	沙羅双樹	一九五五年十二月号	松竹	ラジオ	富永謙太郎	
		ただ君ゆえに	永来重明	一九五五年十月号	松竹		土井栄	
		青い怒濤	宮本幹也	一九五六年九月号	日活	テレビ	田代光	

この作成手順を簡単に示しておきたい。作成作業全体とおして、目次を通覧するだけではなく、すべて誌面を確認している。読み切り連載は、そのシリーズを連載小説としてカウントしている。ただし、読み切り連載のかたちでの芸能人物語はカウントしていない。これは、小説というよりも芸能記事と考えられるからである。映画化・ラジオドラマ化等は、目次や誌面でそれが謳われているものを記載した。

この表から、一九五〇年代の連載小説の作家の多くが大衆小説の作家であったこと、また映画・ラジオ・テレビとの連動が見られることがわかる。『平凡』においても連載小説と映画との連動が見られる。その割合は、『平凡』のほうがいい。具体的には、『明星』の場合は五八本の連載小説のうち三四本が映画化されている。割合は約五八・六パーセントである。これに対し拙著所収の『平凡』連載小説一覧を見ると、一〇九本のうち八三本が映画化されており、割合は約七六・一パーセントである。

続く第三節から第五節では、一九五〇年代の代表的な連載小説とそのメディアタイアップ展開について、誌面をたどり見ていきたい（引用においては、算用数字を漢数字にするなど、適宜統一をはかっている）。

三 北條誠『この世の花』『続・この世の花』

北條誠『この世の花』は創刊号（一九五二年十月号）から一九五五年八月号まで、『続・この世の花』は一九五五年九月号から一九五六年十二月号まで連載された。

一九五五年三月号の『この世の花』掲載の一頁目（一二二頁）には、文化放送で毎週土曜日午後九時三〇分から一〇時まで、朝日放送で毎週水曜日午後九時三〇分から一〇時まで放送される旨が記載されている（四月号からは神戸放送がくわわっている）。

四月号のモノクログラビアでは、「ラジオできける三大小説」と題した見開きの頁に、『明星』連載中の『花嫁はどこにいる』『噫、その人を…』『この世の花』それぞれの収録風景の写真が掲載されている。

さらに、小説『この世の花』の最終頁（一八二頁）の囲み記事「ファンの皆さへ」には、『この世の花』は圧倒的好評のうちに松竹で映画化され、三月第一週（第一部）三月第二週（第二、第三部）と、ひきつづき封切られます。ご期待ください！」と書かれ、配役が記載されている。

五月号では、一〇八頁から一一七頁まで『この世の花』が掲載された続きに、一一八頁から一二一頁まで「この世

の花座談会 タネあかしあの手この手」が掲載されている。出席者は、北條、監督の穂積利昌、出演者の淡路恵子・川喜多雄二・水原真知子である。

十二月号では、モノクログラビアで見開き二頁に、「続この世の花 上州ロケ」と題しロケの模様の写真が掲載されるとともに、「配役あて大懸賞」が告知されている。

『続・この世の花』掲載の一頁目（一五六頁）には、「松竹映画化 十一月八日封切 主題歌コロムビア」と記載されている。

そのほか、「アンテナは花ざかり 放送劇のヒロインめぐり」と題した記事（一八八頁〜一九一頁）では、『この世の花』の久美子 山岡久乃さん 『花ふたたび』のまゆみ 向井真理子さん 『君美しく』の茜 水城蘭子さんが登場している。

二四三頁から始まる「映画封切館」の頁では、「日本映画」の最初に『続この世の花』が紹介されている。

一九五六年一月号の巻頭グラビア「歌の明星ヒットソング集」は全四頁からなっており、最終頁は、一頁を全面使って島倉千代子の全身写真と映画のスタイル写真が組み合わせられ、『この世の花』主題歌「この世の花」、『続この世の花』主題歌「おもいでの花」の歌詞が掲載されている。

る。いずれも作詞は西条八十、作曲は万城目正である。

島倉の芸能界デビューのきっかけは、『平凡』とコロムビアレコードのタイアップでおこなわれた第五回「コロムビア全国歌謡コンクール」（一九五四年）であった。

翌二月号のモノクログラビア「有川の新居 川喜多雄二さんの新居訪問 川喜多雄二さん 島倉千代子さん」には「この世の花」の歌詞が掲載され、リード文には次のように書かれている。

川喜多さんの豪華なお宅が十月に完成しました 川喜多さんは本誌連載小説の『この世の花』映画化で 薄倅の女久美子 由美に慕われる有川を演じて好評でした またこの映画の主題歌「この世の花」をうたって一躍人気歌手となった島倉千代子さんは大の川喜多さんファンです そこで今日はその新居を訪問していただきます

四月号のモノクログラビア「ロケーション便り」では、「椿の大島へ」「続『この世の花』第六部第七部」との見出しのもとロケの模様が写真で紹介され、主題歌「さすらいの花」の歌詞も掲載されている。

六月号では、三頁にわたるモノクログラビア「ラジオスタアのこの世の花」において、ラジオの出演者がそれぞれの役の衣装を着て撮影された各場面の写真が、掲載されている。放送局で北條を囲んだ集合写真も、掲載されている。

八月号では、「映画化される明星の評判小説 ロケめぐりセットめぐり」と題した記事（八八頁〜九一頁）において、『マリヤ観音』『続この世の花』『花嫁募集中』の三作品の撮影模様が写真とともに紹介されている。

このほか、「今月の映画案内」（一八三頁〜一九〇頁）の一頁目では『続・この世の花・第八部 さすらいの浜辺』の大島ロケの様子が紹介されている。

十月号では三頁にわたるモノクログラビア「『この世の花』ブーム」がある。これは、映画『この世の花』出演の川喜多雄二と淡路恵子の大きなツーショット写真と映画『この世の花』の第一部から第八部までのスチール写真、さらには新派『この世の花』舞台の写真一枚とラジオ『この世の花』収録関係の写真二枚計三枚の小さな写真で、構成されている。

この号では一〇二頁から一一一頁まで『続・この世の花』が掲載され、一二二頁〜一二五頁に「お好み座談会映画★ラジオこの世の花大会」が掲載されている。これは、

北條と、映画・ラジオで有川・久美子・由美を演じる芸能人計六人との座談会である。一一五頁には「囲み記事」『この世の花』と島倉千代子さん」が掲載されている。

十二月号では、「人気の連続もの」と題した見開き二頁の映画紹介記事の右上に『この世の花』の写真入り記事が掲載されている。

「スタジオ・ニュース」と題した見開き二頁（二二二頁・二二三頁）の左頁（二二三頁）の「いよいよ完結するこの世の花」冒頭には次のように書かれている。当時としては長いシリーズの映画であったことがうかがえる。

本誌連載の長篇小説（北條誠作）を映画化した松竹の『この世の花』は昨年三月に第一部を発表以来、全国的に大へんな反響を呼び一年半にわたって回を重ねてきましたが、こんどの第九部、第十部をもっていよいよ完結することになりました。

とにかく、こんなに長く評判をつづけた映画は初めてで、全部のフィルムをつなぎあわせると、ざっと五万フィート（一万五千三百メートル）にもなり、長尺の日本新記録をつくりました。

この号に『続・この世の花』の「完結篇」が掲載された。ところでも一九五六年十一月十五日から『明星アワー』がラジオ東京で放送を開始した(『平凡アワー』が一九五一年十一月に文化放送で始まっている)。一九五七年三月号の最終頁「明星アワー」では、番組第六回目「島倉千代子さんと川喜多雄二さんの『この世の花』コンビで『東京の人よさようなら』」収録の模様の写真一枚が掲載されている(写真からこれは公開録音と思われる)。

四 源氏鶏太『青空娘』

源氏鶏太『青空娘』は、一九五六年七月号から一九五七年十一月号まで連載された。一九五六年七月号の目次では、『青空娘』と菊田一夫『忘却の花びら』²が「二大新連載」として示されている。

一九五七年一月号には、「若尾ちゃんは青空娘 源氏先生こんにちは」と題した見開き二頁のモノクログラビアがある。これは、若尾文子が源氏の家を訪問したものである。編集部による次の文章が添えられている。

八月号から本誌に連載され圧倒的な人気を呼んでいる源氏先生の野心作青空娘は 映画化も本決りになりい

まや大映で着々とその準備が進められています 一方編集部には毎日のように 悲しみや苦しみに負けない 健気なヒロイン有子の役にたいするご希望の投書も ひっきりなしに寄せられています 今日皆さまの夢を実現しようと最もご希望が多かった若尾ちゃんに駒場の森にほど近い閑静な源氏先生のお宅を おたずねしていただきました

四月号では、「耳から聞く本誌連載小説いよいよ登場! 明星アワーの『青空娘』と題した一頁のモノクログラビアがある。次の文章が添えられている。

青空のような娘になりたい……あふれ出る涙をこらえて明るく呼びかける若尾ちゃんの愁いをおびた声で始まる『明星アワー 青空娘』本誌連載で爆発的人気を続ける青空娘がいよいよ本格的ドラマとして 明星ならではの豪華キャストを配し来る二月二十一日よりおなじみ明星アワーに登場します

このグラビアには、出演者たちと源氏の写真が掲載されている。第一回の出演者は、菅原謙二・阿部寿美子・東山

千栄子・若尾文子・宮坂将嘉・大木民夫・小泉博である³。

また、二四一頁の囲み記事「青空娘放送開始！」には、以下のように書かれている。

主役の有子は若尾文子さん

本誌連載の小説で圧倒的な好評を博している源氏鶏太先生の、『青空娘』が、二月十一日午後九時三十分のラジオ東京を皮切りに、いよいよ『明星アワー』（津村順天堂提供）の電波にのりました。どんな苦しみにも負けずいつも青空のように明朗な主役の小野有子には、人気投票で女優ナンバー・1の若尾文子さん。二見桂吉には菅原謙二さん。広岡に小泉博さんなどの麦のグループ。それに劇団三期会や東山千栄子さんをはじめとする各劇団のベテランが、あけて参加するという豪華配役です

若尾さんが「私の声で、悲しみの中にも明るい有子の感じを出せるかしら」といいながらも、「本格的なドラマははじめてなので一生懸命やります」と張り切れば、原作者の源氏先生も「若尾さんなら僕のイメージにピッタリだ」というわけで、快調のすべり出しをし

ました。

ぜひ『明星アワー』をおききください。（全国各局の放送時間は二三五ページにあります。）

（配役）小野有子（若尾文子）二見桂吉（菅原謙二）広岡良輔（小泉博）おばあさん（東山千栄子）おじいさん（宮坂将嘉）母 達子（堀越節子）喫茶店の女（山岡久乃）

二三四頁から『青空娘』が掲載されており、二三五頁欄外「☆明星アワーで放送開始！」によると、この番組は七局で放送されている。

五月号では目次の折込の裏に、『青空娘』主題歌の楽譜と歌詞ならびに鳥倉の写真が掲載されている。

『青空娘』掲載頁の囲み記事「ドラマ青空娘の主題歌誕生！」（二一九頁）では、主題歌は西条八十作詞・万城目正作曲・鳥倉千代子歌であるとされ、歌詞が掲載されている。記事には「この世の花」以来のヒットメロディ誕生という見出しのもと、次のように書かれている。

★二月二十一日から『明星アワー』（津村順天堂提供）の電波にのった連続放送劇『青空娘』は、麦のグルー

プをはじめ、放送のベテランをずらりとそろえた豪華番組だけに、早くも評判になっていますが、西条八十、万城目正、島倉千代子の名トリオでおくる主題歌「青空娘」が話題をよんでいます。

源氏先生の作品の愛読者で小野有子ファンの島倉さんはたいへんな熱のいれようで主人公の幸福を祈りいっぱいの感情をこめて歌ったもので、島倉さんの出世作、「この世の花」につぐヒット曲誕生ともつばらの噂です。

二七五頁の囲み記事「青空娘放送こぼれ話」では、菅原謙二の熱の入れようと源氏の母親が『「青空娘」の大ファン』だというエピソードが紹介されている。

六月号では、『青空娘』掲載頁のなかに囲み記事「またも誕生！『青空娘』の新しい歌」（一六三頁）が掲載されている。「ピクターの新進中原葉子、五月みどりさんの挿入歌をご紹介しますしよ」と記され、五月は、窪田篤人作詞・宮城秀雄作曲「私はひとり」、中原は、同「そとと母の名を」を歌う。

この号の「ラジオ・テレビのページ」のなかに「風が吹いても雨がふっても『青空娘』録音夜ばなし」の記事がある

る。その冒頭は次のように書かれ、このあと出演者のエピソードが紹介されている。

☆：「若尾ちゃんにぜひ歌ってもらってください」「有子はいっお母さんに逢えるのでしょ？」「有子は二見と広岡のどちらと結ばれるのでしょうか？」

まだ二カ月しか経たないのに『青空娘』の係には投書が山。しかし結末は源氏先生もまだはつきり決めておられないようだ。先が楽しみ。

なおこの号には、「歌姫さいはての国をゆく 島倉千代子さんの北海道巡業」と題した三頁のモノクログラビアがあり、一〇〇頁〜一〇五頁にかけてが「特集 島倉千代子」となっている。

七月号では、『青空娘』掲載頁のなかに囲み記事「ラジオドラマ『青空娘』の感想をお寄せください」がある（一一五頁）。次のように書かれたうえで、「◇宛名 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三 集英社 明星ラジオ係」となっている。

「明星アワー」でおなじみの連続放送劇『青空娘』は、

スタッフの好演によって聴取率も上昇の一途をたどり、人気番組として各方面の話題をよんでいます。まずまずこの番組の充実をはかるため、ドラマ『青空娘』についてあなたの感想（聞いている放送局名も明記のこと）をお寄せください。抽選によって三十名の方につぎの商品をお贈りします。

この号の巻末のグラビア「今月のトピックス」のなかには「明星アワー『青空娘』の音楽録音風景作曲家の宮城秀雄さんと中原葉子さん」が掲載されている。

八月号の『青空娘』掲載頁のなかに囲み記事「青空娘放送こぼれ話」がある（一一七頁）。ここでは、出演者の阿部寿美子と久保菜穂子のエピソードや聴衆者からの投書が紹介されている。

後者には、このような文言が見られる。「ダイヤルを切りかえて、一週間の中に同じものを三回聞きました」という熱心な少女ファン。「学校も終って二里の山道を帰って聞かため、友達に協力してもらって急いで帰ります。放送劇ぎらいの兄もダイヤルをきりかえて待っています」という青梅市のある定時制高校の少女。「青空娘の時間だけではどんなことがあってもきいています」という四十三歳のお

母さんなど話題は豊富です」。

九月号ではモノクログラビア「芸能ニュース」において六つのニュースが写真で伝えられているが、そのうちひとつが「本誌に連載 好評の連続放送劇『青空娘』の主題歌がコロムビアで吹きこまれました」である。

『青空娘』掲載頁に囲み記事「青空娘放送こぼれ話」がある（一一五頁）。このなかで、「『青空娘』感想文の当選発表」として、「本誌で募集したドラマ『青空娘』の感想文は、締切日までわずかでしたが、応募数は四千通をこえ、有益なご意見を多数いただき厚く御礼申し上げます」と記載されている。

十月号では二〇〇頁から二〇八頁まで『青空娘』第十六回が掲載されている。二〇八頁ではその本文のあとに、次の告知が記載されている。「《映画化のお知らせ》お待ちかね『青空娘』は、若尾文子・菅原謙二のコンビで、このほどクランク・イン（十月三週封切）しました。出演者の顔ぶれは、このほか川崎敬三 穂高のり子 八汐悠子 藤田佳子 矢島ひろ子という豪華キャストです。ご期待ください。若尾と菅原の共演はラジオドラマと同じである。それだけふたりのイメージが強かったということであろう。

十一月号では、「青空娘 ロケ報告」（七六頁・七七頁）

において、伊豆半島城ヶ崎海岸でのロケの様子が記事と写真で紹介されている。

「映画封切館」の頁では、一七〇頁・一七一頁で『青空娘』が紹介されている。この冒頭には次のように書かれている。

〈観賞手引〉本誌に連載されて大評判になった小説の映画化でラジオ東京の連続放送劇にもなったことはご存じの通り。放送劇のときと同様有子に若尾文子さん、二見先生に菅原謙二さんが扮します。演出は『くちづけ』でデビューした増村保造監督。

紹介した本文のあとでは次のように記されている。「☆…大映カラー総天然色。十一月一週に封切られる大映東京を総動員した文字通りの大作で、『青空娘』愛読者のみなさんにも一見をおすすめします」。

この号の二五八頁から二六八頁にかけて『青空娘』最終回が掲載されているが、二五八頁の本文の前には次のように書かれている。

「お母さん！」思えば悲しい心の旅路だったが、もうこ

れからは青空に母の名を呼ぶこともない。青空の無限は信じてても…：映画にラジオに大人気の評判小説堂々ここに完結！

二六八頁の『青空娘』本文のあとには、次のように書かれている。

ひとびとの心に美しいともし灯をつけるような『青空娘』はラジオに映画にと熱狂的な人気の中に完結しました。作者源氏鶏太先生、佐藤泰治先生、ご愛読いただいたみなさまにあつくお礼申しあげます。大映映画『青空娘』は十月三週に封切りされます。

いずれにも「映画にラジオに大人気の評判小説堂々ここに完結！」「ラジオに映画にと熱狂的な人気の中」とある。じつさい、映画『青空娘』DVD（KADOKAWA発売、二〇一四年）に収録された予告篇の冒頭のナレーションでも、「ラジオに小説に若い女性の人気娘がいよいよ映画になりました」という言葉を確認できる。

十二月号の巻頭カラーグラビアには、「青空娘 若尾文子さん」が掲載されている。

見開き二頁のモノクログラビア「花の招待状 大映撮影所見学 青空娘とスタアたち」は、ジュジュクリームとタイアップしての読者参加企画である。『青空娘』と直接の関係はないが編集部による文章のなかに「青空娘のように明るい娘さんたちに囲まれて 俳優さんも撮影の疲れを忘れてニッコリ」という文言がある。

なお集英社発行の『少女ブック』一九五七年八月号から一九五八年三月号まで、源氏鶏太原作・牧かずま絵の漫画『青空娘』が掲載されている（一九五七年八月号と十二月号は別冊付録に掲載されている）。

五 川内康範『誰よりも君を愛す』

川内康範『誰よりも君を愛す』は、一九五九年十月号から一九六一年七月号まで連載された。

一九五九年十二月号では、『誰よりも君を愛す』の第三回が一〇二頁から掲載されている。このなかで一〇五頁に「歌になった『誰よりも君を愛す』と題した囲み記事がある。本文は次のとおりである。

十月号より本誌に連載、早くも大評判の『誰よりも君を愛す』が、このほどビクターレコードで歌になり

ました。

川内先生の美しい詩をもとに、作曲界のナンバーワン吉田正先生が作曲されたもので、歌はお馴染み魅惑のコーラス、和田弘とマヒナスターズ、そしてハスキー（しわがれ）な声に独特の魅力をもつ松尾和子さん。こういったメロ調のものは恐らくマヒナとしてもはじめての歌ですが、甘く、切なく、そしてやるせないスローナリズムにのったこのメロディーが皆さまのお耳に達するのも間もないことでしょう。（十一月発売）

この本文の下には歌詞が記載されている。本文の上に掲載された写真には「マヒナスターズに囲まれて川内先生（前列向って右から二人目）、松尾和子さん、吉田先生。吹き込みのひととき。」とキャプションがつけられている。一九六〇年二月号には、『誰よりも君を愛す』と題した一頁のモノクログラビアがある。編集部による説明文は次のとおりである。

人気アナウンサーと美貌のステイワーデスの恋の烈しさを描いた川内康範先生の大ロマン 本誌で大好評の連

載小説『誰よりも君を愛す』が、こんど久保菜穂子
安井昌二の好配役でラジオドラマ化され、一月四日か
らニッポン放送をキーステーションにして開始されま
す。

グラビアは、夜の街角にたたずむふたりの写真と松尾和
子の写真で構成され、前者の写真の夜空の部分には白抜き
文字の歌詞が記載されている。

三月号では、『誰よりも君を愛す』第六回が一八二頁から
掲載されている。一九一頁には囲み記事「大好評！ 誰よ
りも君を愛す」があり、「吹きこみ打ち合わせ中の和田弘と
マヒナスターズの皆さん」「最近の松尾和子さん」の写真と
ともに、「明星連載小説『誰よりも君を愛す』主題歌 連続
放送劇『誰よりも君を愛す』主題歌」の歌詞が掲載されて
いる。この記事の本文は次のとおりである。

明星十月号より連載の「誰よりも君を愛す」はレ
コードに放送に爆発的な人気を呼び、一九六〇年の初
頭を飾る大ヒットとなりました。

この主題歌は去る十二月和田弘とマヒナ・スターズ
及び松尾和子の皆さんの歌でビクターレコードより発

売され、早くもヒットナンバーにあげられるほどにな
りました。一方放送もニッポン放送をキーステーショ
ンとして毎日（但し土曜日曜をのぞく）十五分の帯番
組として全国に中継されています。

なおこの放送吹きこみの詳細は、本誌二二六頁に掲
載されてありますから、あわせてごらんください。

二二六頁には「ついに放送開始！ 本誌連載誰よりも君
を愛す 主演は安井昌二・久保菜穂子」と題した一頁の記
事が掲載されている。

五月号の巻頭には十頁の折り込み付録「和田弘とマヒ
ナ・スターズ 魅惑のコーラスアルバム」があり、その一
曲目が「誰よりも君を愛す」となっている。

十月号の一〇六頁から『誰よりも君を愛す』第十三回が
掲載されており、一〇七頁に「大映映画完成近し！ 主題
歌・ビクター・レコード」と記載されている。

一一五頁に囲み記事「大映 秋の超大作『誰よりも君を
愛す』『最高』のメロドラマを作ります 抱負を語る田中
監督と本郷功次郎」が掲載されている。「慎重に打ち合わせ
中の田中重雄監督と本郷功次郎さん」「原作者の川内康範
先生」の写真が掲載されている。記事の本文は次のとおり

である。

本誌連載小説「誰よりも君を愛す」がいよいよ大映で映画化、この九月中旬からいっせいに封切られることになりました。

ご承知のように、この小説は、テレビアナウンサーの半沢明人と、スチュワーデスの森砂江子の美しくも激しい愛情をテーマにした一大メロドラマで、作者の川内康範先生も、本格的な恋愛小説として、「私のライフワークとしたい」と意気こんで執筆されている力作です。

大映としても、久しぶりのメロドラマ映画のこと、特に監督には三十年の経験を誇る田中重雄監督を配し、キャストに、若尾文子（森砂江子）本郷功次郎（半沢明人）野添ひとみ、叶順子、菅原謙二、川崎敬三 ETC……と大映最高のオールスターを総動員して、意欲的な撮影を進めています。

そこで本誌では大映多摩川撮影所で、打ち合わせ中の田中監督と本郷功次郎さんをつかまえ、この映画について、いろいろと抱負などをうかがってみました。

「メロドラマというのは、一番むずかしいですね。そ

れだけに作りがいがあるというもの。とにかく今までになかった新しいもの、たとえばドキュメンタリー・メロドラマといったリアルなものを作りたいですね」
開口一番、田中監督がその抱負を語りますと、そばから本郷さんが、

「僕は現代もののメロドラマ出演ははじめてなんです。時代劇のメロなら別になんとも感じないんですが、現代物のメロはセリフがテレちゃって……。でもお客さんに笑われたり、バカにされないようないい仕事をしますよ」

とキツパリ語ります。

「ロケもやるんですね」

記者の質問に、

「ええ、北海道と大阪にね、東京を中心として東西に動くわけですから、スケールの大きいカラー作品になりますよ」

それに例の松尾さんとマヒナ・スターズの歌う「誰よりも君を愛す」のメロディーを全編に流して歌謡映画としても本格的なものを作りあげるとか。「吉田正君（誰よりも……の作曲者）とは古い友人なので全面的に協力してもらおうつもり」ということで、田中監

督の抱負はまだまだ続きますが、最後に本郷さんも、

「今、ヌーベル・バーグなんて荒っぽい映画が流行っていますが、僕はそれに挑戦しますよ。本格的メロドラマでね……」

と結んでくれました。とにかく期待にたがわぬ最高の作品ができそうです。

この号の二三三頁から二三七頁までが「九月の映画案内」の頁となっており、二三六頁から二三七頁にかけて「本郷・若尾の大恋愛篇 誓いの心かたく美しく 誰よりも君を愛す」という見出しのもと、映画のあらすじが紹介されている。

一九六一年二月号では『誰よりも君を愛す』が掲載されている一二九頁の欄外に、次のように記載されている。「★今月の歌謡ニュース 「誰よりも君を愛す」 レコード大賞受賞! この小説の主題歌「誰よりも——」が六〇年の日本レコード大賞を獲得、作詞の川内、作曲の吉田両先生、歌の松尾さん、マヒナの方々が表彰されました」。このように「誰よりも君を愛す」は第二回レコード大賞を受賞した。三月号の八六頁・八七頁には「お忙しい芸能夫妻インタビュー ケンカしているひまもない」というタイトルのも

と、八六頁で川口浩・野添ひとみが、八七頁で大野喬・松尾和子が紹介されている。八六頁の見出しには「メロドラマのようで悲しいの!」と、八七頁の見出しには「心はいつも「誰よりも君を愛す」と書かれている。

『誰よりも君を愛す』掲載頁の一六六頁・一六七頁には、「歌でも日本一 ディスク大賞を受けた『誰よりも君を愛す』と題した記事がある。本文を以下に紹介する。

小説、『誰よりも君を愛す』がはじまってからはよくも一年あまり。明人と砂江子の運命は波瀾にみちて、毎日私たちの手に汗をにぎらせますが、この小説とともに去年、日本全国をフービしたのがその主題歌、川内康範作詞、吉田正作曲、松尾和子とマヒナ・スターズがうたう「誰よりも君を愛す」でした。

この小説にふさわしい哀切のムードをもりあげた作詞、作曲。それにふさわしい歌い手をえて、「誰よりも君を愛す」は歌でも日本一、十二月二十八日、権威ある日本レコード大賞をうけました。

(略)

映画も、三月には続編ができるのか。「誰よりも——」ブームは、今年もつづくことでしょうか。

なおこの号の映画紹介の頁に、新東宝『誰よりも金を愛す』という映画が、「喜劇スタアが総出で競演する爆笑映画。」というリード文のもと紹介されている。「誰よりもブーム」の一端をうかがえよう。

また巻末の「明星ニュースフラッシュ」には十一枚の写真が掲載されている。その一枚は「誰よりも君を愛す」でディスク大賞を受けた松尾さん 祝賀会には大ファンの大千秋山投手も出席」である。

四月号の『誰よりも君を愛す』の掲載頁（一六七頁）に「おしらせ」と題した困み記事がある。そこにはこう記されている。「昨年大映で映画化された『誰よりも君を愛す』の姉妹編『誰よりも誰よりも君を愛す』の映画化が決定、本郷、叶のコンビで陽春四月のスクリーンをかざります」。

五月号には、「本誌連載小説映画化 大映『誰よりも誰よりも君を愛す』ロケの純愛コンビ 浅間高原に春は浅く」と題した一頁のモノクログラビアがある。「本郷功次郎さん叶順子さん」の写真が掲載されている。編集部の文章は次のとおりである。

信州と上州のさかい 浅間山の煙をまじかにあおぎ
みる軽井沢のあたり まだスケート客がたえませんが

それでもあゆみよる春のきざしは 草木の色にもうかがわれます ロケは本郷さんと叶さんの愛しあう二人が本郷さんの実家に父母を訪ねる場面 前編『誰よりも君を愛す』ですっかりイキのあつたコンビだけに撮影はまことに快調 『明星』の評判小説の映画化ですから この場面はよくご存じと思います

新作映画の紹介頁では、二〇四頁に「大映 誰よりも誰よりも君を愛す」の見出しがある。冒頭には「『明星』連載『誰よりも君を愛す』の映画化で、前編にひきつづき本郷功次郎、叶順子のコンビがくりひろげる純愛のものがたりです。軽井沢高原にロケ。」とあり、あらずじが紹介されている。

なお「誰よりも君を愛す」と題した公演が、一九六一年一月三十一日から二月六日まで日劇で開かれている。「読賣新聞」一九六一年一月二十九日朝刊十一面に掲載された広告には、「レコード大賞受賞記念公演」「マヒナ・松尾・橋の受賞トリオ他が六一年の歌謡界に挑戦して、ステージいっぱいほら歌の祭典！」とある。

六 おわりに―今後の課題

以上本稿ではまず、一九五〇年代『明星』連載小説ならびにそのメディアアップ展開の全貌を、表を用いて示した。そのうえで、とくに代表的なものと同判断されうる『この世の花』『続・この世の花』『青空娘』『誰よりも君を愛す』が他のメディアと関連していく経緯を当時の誌面であらわした。

この経緯においては、ラジオドラマの収録や映画の撮影の様子が伝えられていた。それとともに、俳優が作家を囲んでの座談会や俳優による作家の家庭訪問等のかたちをとって、作家と俳優の顔合わせが読者に示されるものとなっていた。このようにして、これらの写真を目で見たいという読者の欲求に応えたり、あるいは小説・ラジオドラマ・映画等への読者の興味を高めていたことを、うかがうことができる。

今回扱いきれなかったこととしては、「思春期小説」と銘打たれて一九五三年六月号から一九五五年四月号まで連載された池田みち子『花開く乙女たち』のようなセクシュアリティを扱った作品、一九六〇年代以降の連載小説、連載小説以外の随筆等の文芸作品などが挙げられる。

これらについては、他日を期したい⁴。

【注】

- 1 北條誠『この世の花』は一九五五年八月号で終了し、九月号から『続・この世の花』が連載されている。だが目次では、一九五五年十月号まで『この世の花』と記載されている。
- 2 『忘却の花びら』の連載が始まる前の号である、一九五六年六月号の「ラジオ・テレビのページ」の一六一頁に、「話題は菊田一夫の『忘却の花びら』と題した囲み記事がある。そこにはこう記載されている。

四月からはじまった新しいラジオ番組をみなさんもうお聴きになりましたか。

まずなんといっても最大の話題は毎週木曜日夜、NHK放送の菊田一夫作『忘却の花びら』です。前作の『由起子』が地味な作品であったので、今度は、『君の名は』に輪をかけたような甘いメロドラマ。

（略）

また明星には、このドラマを特に菊田先生みずから筆をとって小説とし、七月号から連載されますから、御期待ください。

（略）

八月号では九八頁から『忘却の花びら』が掲載されており、この頁に「東宝総天然色映画化決定」と記載されている。

九月号では「ラジオ・テレビのページ」のなかで、克己役の白井正明と鮎子役の友部光子が対談した「二人の恋はこれからネ 忘却の花びらうらばなし」が見開き二頁で掲載されている。このリード文には「本誌連載・NHK連続放送劇で、圧倒的人気の『忘却の花びら』うらばなしを克己さんと鮎子さんがそと『明星』のマイクに送ってくださいました」とあり、ふたりの対談が写真入りで掲載されている。この見開きの左下では囲み記事「ハリキル菊田一夫先生」と題し菊田の談話が紹介されている。このなかで菊田は『君の名は』、『由起子』、『忘却の花びら』と三部作のつもりです」と述べている。

一九五七年七月号では、「今月の映画案内」全七頁の二頁目三頁目の見開きが「忘却の花びら・完結篇」と題され、スチール写真八枚が掲載されている。以下の文章が添えられている。

全国のファンが待望していた『忘却の花びら・完結篇』です。お話は久しく本誌にも連載されましたし、ラジオでもおなじみのことでしょうか。今回は鮎子と克己が幾度かの障害や危機をのりこえて、結ばれるまでを描いています。

この頁は日本全国にわたったロケーションやセット撮影をスナップにしたものからえらんでみました。

以上から、この作品はラジオドラマ→小説→映画という順序でメディアタイアップ展開がなされている。

3 この号の一五〇頁・一五一頁に「ふるって御応募ください 明星の二大企画！発表」の告知が掲載されている。一五〇頁は、「一九五七年ミス明星ミスター明星大募集」である（『平凡』では第一回の「ミスター平凡」「ミス平凡」の募集を、一九五一年十月号で告知している）。リード文には次のようにある。

毎号驚異的な躍進をつづけているみなさまの雑誌『明星』は松竹株式会社と共同主催で、若さにあふれたかな知性と近代的な個性美にかがやく「ミス明星」「ミスター明星」を全国から募集し、入選者は松竹ニューフェイスとして入社、銀幕にその天分を發揮していただくことになりました。つぎの規定をお読みの上ふるってご応募ください。

このコンテストは各地方でおこなわれる第二次審査を経て「最終審査は七月に東京で盛大に行います」とある。

最終審査の審査員は、次のように書かれている。「審査員 松竹本社より高村潔専務取締役、野口鶴吉取締役、島尾良造宣伝部長、中村登大船監督、小倉武志プロデューサー、映画スタアは佐田啓二、大木実、川喜多雄二、高橋貞二、菅原英一、田浦正己、石浜朗、有馬稲子、野添ひとみ、小山明子、杉田弘子のみなさん。作家画家では、石坂洋次郎、源氏鶏太、林房雄、大林清、北村寿夫、岩田

専太郎、杉浦幸雄の諸先生「明星」からは本郷編集長が出席の予定」。このように源氏が審査員に入っている。

十月号にモノクログラビア見開き二頁で掲載された「一九五七年度ミス・ミスター明星最終候補決定！」のリード文では、「七月三〇日 神田一ツ橋の如水会館で 明星・松竹共催 一九五七年度ミス・ミスター明星」コンテストが行われ 最終候補者九名が決定しました」と伝えられている。

審査員席に座った審査員の写真が掲載されており、それは(右から順に) 山野美容学校校長山野愛子 漫画家杉浦幸雄 作家北村寿夫 作家大林清 作家源氏鶏太 画家岩田専太郎 作家石坂洋次郎 松竹株式会社取締役野口鶴吉 松竹石浜朗 株式会社集英社専務取締役明星編集長本郷保雄 松竹杉田弘子 松竹株式会社大船撮影所プロデューサー小倉武志 松竹朝丘雪路となっている。源氏が実際に審査員として出席したことを確認できる。

一九五八年十二月号では、作家等の文化人を読者が囲む定例企画の座談会に源氏が登場している(二〇六頁〜二二一頁)。十名の男女が参加し「源氏鶏太先生を囲む座談会 若いサラリーマンの恋」と題された座談会記事の冒頭の文章は、次のとおりである。

青春小説『青空娘』や、『週刊明星』連載中の『最高殊勲夫人』などでおなじみの源氏鶏太先生は、ごそんじの通り、サラリーマンの生活を描いた作品をたくさんお書きになっておられ映画でもみなさんに親しまれています。

そこで今月は源氏先生を司会にお迎えして、みなさんと同じような職場に働く若いサラリーマン、サラリーガールの方たちにお集り願ひ、毎日の体験を通しての恋愛や結婚のお話をしていただきました。

みなさん、秋の読書シーズンにお送りする若い人たちのペー
ジ、青春座談会の大入り月給袋(?)を楽しみにお聞きください。
い。

源氏の紹介では、「代表作『三等重役』『天下泰平』『青空娘』……」とされている。

4 なお二〇一七年に『週刊読書人』において「創刊六五周年『明星』連載文芸作品をよむ」と題した短期集中連載をおこなった(十月六日号七面・十月十三日号八面・十月二十日号八面)。ご関心のある向きは参照されたい。

付記：調査においては金谷幹夫氏・西一雄氏・中平信氏にご協力をいただいた。記して感謝したい。なお本研究はJSPS 科研費 J15K03855 の助成を受けたものである。

(宮崎公立大学)